

対面, 学会, 審査

吉川 雅英

東京大学大学院医学系研究科生体構造学



第80回顕微鏡学会
第80回学術講演会の
懇親会にて

2024年6月に、無事、顕微鏡学会第80回学術講演会が開催できた事を、大会の運営に協力して下さった皆様、また、参加して下さった皆様に、大会長として感謝を申し上げます。2020年から始まったコロナ禍を経て、2022年にそろりと福島で始まった「対面」の学会が、2023年の島根でほぼ元に戻り、2024年は首都圏近く開催という事もあって1020名と、過去最高(1024名、第70

回大会)に迫る参加者となりました。

さて、対面という言葉がオンラインの対義語として使われるようになったのは、コロナ禍のおかげ(?)でしょうか。生物・医学の研究では、システムが複雑なため、ある遺伝子の機能を調べたいときには、その働きを止めて何が起こるのかを観察する、「ノックアウト」という手法が使われます。2020年からの数年は、「対面」のノックアウトを社会全体で実験したようなもので、今回の第80回学術講演会でも対面の良さを改めて認識させられることになりました。

対面の良いところには様々なものがありますが、一つは「コミュニケーションの効率が高い」ことです。研究の成果は、論文(最近はやがどがオンラインですね)が公式な発表とされますが、論文を読むより、学会発表で聞いた方が、素早く要点がわかるのは私だけでしょうか? 脱線になりますが、最近、私は論文の査読するとき、本文をPC/Macに読み上げさせ耳で聞きながら、目で図を見えています。その意味では、論文を読まず(!)に、学会発表を聞くかのごとく内容を頭に入れてから査読に取りかかっています。話を元に戻すと、対面の学会であれば、わからないところを著者本人に質問して聞く事で、より深く理解することもできます。それに、論文を出すまでの苦労話とか、着想に至った経緯などは、論文には絶対に書いてありません。学会というのは、音楽を生業としている人たちにとってのコンサートと同じですね。研究者が論文を出すのは、レコードやCDを出すようなもの(最近ではサブスク用の音楽配信?). ちなみに、最近は音楽業界はCDや配信の売り上げは横ばいで、コンサートなどのライブ市場で収益を上げているようです。研究者にとっても、論

文の引用数は職探しや研究費の獲得には役に立つかもしれませんが、学会で「発表面白かったねー」と言われることの方が、研究のモチベーションになります。

ただ、私の考えでは対面(あるいはインタビュー)を止めの方が良いことがあります。それは、日本に於ける研究費などの審査や評価です。理由が二つ。一つは、審査における匿名性が確保できなくなってしまうこと。顔が見えると審査員が誰なのかが、審査される人にかかってしまうことで温情が入りやすくなってしまいます。また、インタビューに於ける研究者の熱意に重きが置かれてしまい、研究の質や独創性の部分を客観的に評価するのが難しくなってしまいます。もう一つは、審査される側の負担が二重になってしまうことです。ここからは、半分くらいは私の愚痴も混じっているのですが、文書による研究提案や報告を書くのと、プレゼンテーション用に準備するのは、その構成がかなり異なるので、それぞれの準備にかなり時間を取られてしまいます。

ではどうすれば良いか? という疑問に対しては、海外の審査方法が参考になります。アメリカ国立衛生研究所(NIH)の研究費の審査や、ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム(HFSP)の審査は、基本的には書面だけで行われています。書面に書かれた内容について、複数名の代表審査員が審査結果を発表し、それを審査委員全員(もちろん、書面も見ています)で聞いて、スコアをつけるという形式を取ります。複数名の発表を聞いて判断するので、不当に高くまたは低く評価している意見よりも、論理だった意見が採用されることが多くなります。従って、この方が、匿名性の確保、審査される人の負担、客観性の問題、などの点で優れているように思います。もっとも審査員は自分の専門外の領域について、他人が書いた提案書を説明しないといけないので、負担は大きくなります。例えば、HFSPのグラント審査を、科学者会議(COS)委員としてオブザーバー参加しました。審査委員長の下郡智美さんとは、フランクフルト行き飛行機で一緒になりましたが、10時間のフライト中、ずーっと研究提案書を読んでいました。まあ、そもそも日本は不必要な中間評価や最終評価が多すぎるので、それを減らす事も重要ですけど。

さて、後半は固い話を書いてしまいましたが、明日からは、国際学会のために米国に行く予定です。久しぶりに海外の研究仲間と会うのを楽しみにしています。対面万歳!

吉川雅英 (Masahide Kikkawa)

略歴

1992年 東京大学・医学部卒。同大学・医学系研究科で1997年に博士取得

2001年~ 米国テキサス大学サウスウェスタン医科大学・助教授

2007年・京都大学・理学部を経て、2009年より現職。専門はクライオ電子顕微鏡を用いた細胞生物学。